

大正十三年一月二十日印刷納本  
大正十三年一月二十五日發行

神戸日支實業協會々報 (第十號)

# 日 本 實 業

第三年一月號

## 本 紙 主 要 目 次

西島南國之訃

日 文 欄

大正十三年を迎へて……………一

日支親善論……………二

支那避難者に對する同情が對支貿易上に影響を齎す……………二

排日問題に對する卑見……………三

華 文 欄

中日兩國關係談……………六

文字音呼復古論質禹域有識之士大夫……………六

中華民國震災遭難死者追悼會……………八

大阪貿易同盟會主催追悼會……………八

留日實教修業者歸國……………八

復興第一次新春之東京……………九

會 報

日支實業協會編纂部發行

株式會社

鐘淵紡績會社

一、商事、民事、及刑事

不要介紹 易應商量

辯護士

法學士  
前判事

中井一夫

事務所 神戸市下山手通六丁目一五七番邸  
電話 元町 二一六〇番

同 孚 泰

鄭 祝 三

神戸市海岸通四丁目  
電話 三宮五四番

曾 弟 臣

神戸市京町六七  
チャーター銀行  
電話 三宮二六番

吳 錦 堂

舞 子 海 岸  
電話 舞子三二番

建 和 隆

海岸通五丁目四十番  
電話 元町五二五番



興祥號

林長祥

神戸市榮町一丁目一番  
電話三宮二九一七番

支那料理

杏香樓

神戸市海岸通二丁目十八番  
電話三宮一六四二番

鮑翼君

神戸市海岸通三丁目正金銀行辨房  
電話三宮五二一番

東南公司

神戸市榮町二丁目六十六番  
電話三宮二四七三番

仁記洋行

神戸市海岸通四丁目三十九番  
電話三宮(五八二八)番

廣興昌號

廖道明

神戸市海岸通二丁目二十七番  
電話三宮(九六七一)番

合昌號

陳源來

神戸市下山手通八丁目七十九番  
電話元町三三五番

東盛泰

神戸市京町七十六番  
電話三宮一八六番

永興發

陳廷箋

神戸市海岸通三丁目二番内  
電話三宮三九五二番

復和裕號

馬聘三

神戸市二宮町三丁目五番  
電話三宮九一二番

王敬斗

復興公司

神戸市海岸通三丁目二番  
電話三宮五二一番

廣東料理

醉霞品芳

神戸市三宮町三丁目五番  
電話三宮五二二番

メリヤス輸出貿易商

權田清

大阪市北區上福島一丁目四ノ二  
出入橋電停二ツ西ノ辻南入

海產貿易商

佐々木種三郎

事務所 神戸市榮町五丁目五一番  
電話三宮(七四二)番

滿鮮貿易商

新原次太郎

神戸市鍛冶町三十番  
電話本局(四三五)番  
(二八九四)

米料肥穀商

安福嘉一郎

神戸市小物屋町一五番  
電話三宮三〇二番

海陸產貿易商

阿波野松太郎

神戸市榮町六丁目  
電話元町長三二九番  
電略(アワノ)又ハ(ア)

日本燐寸製造株式會社

本多一太郎

明石郡鹽屋  
電話舞子一六〇番

東洋燐寸株式會社

瀧川儀作

神戸市下澤通六丁目  
電話本局四七九〇番

海運業

福原芳次

神戸市北長狹通五丁目  
電話元町二四五番

海陸產物商

植村音吉

神戸市榮町一丁目二一  
電話三宮二二四四番

三十四銀行神戸支店

田中栞

神戸市榮町三丁目  
電話三宮(三七三番)  
(五九九番)

株式會社 互光商會

田中卯三郎

神戸市西町三十四番  
電話三宮(三二八番)  
(三二九番)  
(三三八番)

神戸商業會議所

福本義亮

神戸市旗塚通六丁目  
電話三宮一五四五番

輸出入貿易商

野澤雄治

神戸市仲町五十五番  
電話三宮(七二)七三番

瀧川辨三

神戸市生田町一丁目  
電話三宮二七四番

竹田龍太郎

神戸市葺合町二一〇  
電話三宮一三四八番

田村市郎

神戸市平野天王谷  
電話元町(九八)三五番

三十八銀行神戸支店

宇川雄太郎

神戸市榮町三丁目  
電話三宮(二二)一八番

吳服商

吉田喜三郎

神戸市多聞通五丁目  
電話元町一六五四番

海 運 業

西 川 莊 三

神戸市中山手通二丁目  
電話三宮(三〇四三番)  
(三三九三番)

三井物産會社船舶部

川 村 貞 次 郎

神戸市山本通五丁目  
電話元町九二三番

岡 崎 銀 行

岡 崎 忠 雄

神戸市山本通四丁目  
電話三宮四六番

橫濱火災保險株式會社神戸支店

龜 井 捨 次 郎

神戸市外西灘村畑原一七三  
電話三宮一〇〇二番

山下汽船株式會社

鑄 谷 正 輔

神戸市山本通四丁目  
電話三宮三二五〇番

岸 本 恒 太 郎

神戸市葺合町一九五三  
電話三宮三〇八〇番

船井長治

神戸市元町五丁目三五  
電話 元町四〇七番

三菱商事會社船舶部

早川茂三

神戸市下山手通八丁目  
電 三元町三一〇番

吉川商店

宮武勢藏

神戸市元町四丁目九八  
電話 三宮三六五番

肥料製造販賣業

多木余次郎

神戸市鍛冶屋町十一番地  
電話 本局四七二番  
本邸 播州別府港

三菱倉庫株式會社

三橋信三

神戸海上運送  
火災保險株式會社

宮脇四郎

神戸市明石町十九番  
自邸 神戸市上筒井通七丁目一八



山下汽船株式會社

畑

茂

神戸市西須磨上稻荷前  
電話三宮二〇四四番

十五銀行神戸支店

咲

花

一

二

三

神戸市仲町三十五番

勝田汽船株式會社

勝

田

銀

次

郎

神戸市仲町二十七番  
電話三宮三九九番

伊

藤

長

次

郎

神戸市北長狹通四丁目  
電話三宮六八五番

田

村

新

吉

神戸市榮町六丁目  
電話元町(自五〇一  
至五〇五番

神戸市元町通六丁目二八〇番

辯護士 飯田勇記

辯護士 富山二郎

事務所

電話元町五七一番

山田直三郎

大阪市東區瓦屋町四番町五ノ一  
電話南六〇六番  
元大阪清語學校出身

野々村爲二郎

神戸市海岸通四ノ一九  
デラカンブビルバー

安堂寺橋食堂

小林幸雄

大阪市南區安堂寺橋西詰  
電船橋二四七七番

電機製造商

小泉正直

大阪府西成郡今宮町  
東萩六四二



## 函南 西島良爾氏之訃

本會の囑託で本誌の主幹たる函南西島良爾氏（從七位勲六等）は十一月中旬から肝臓硬變症で療養中であつたが養生叶はず、十二月十六日神戸市再度筋九十九の自邸で逝去した、氏は静岡縣の人、性質恬淡、趣味廣汎、支那語、漢籍の造詣深く、時文、詩歌をよくし支那及び支那語に關する著書十數種あり、多年日支親善の爲め力を致すところがあつた、享年五十四歳、四男二女あり、前途尙春秋に富んでゐたのに惜しむ可き限りである。

## ●大正十三年を迎へて

大正十二年は實に恐ろしい年であつた、此世では再び會ひ難き悲惨な運命に廻り遭はれた人も澤山あらう、吾人は永久にこの悲壯なる出來事を忘れることは出來ない、しかしこれも自然が投げかけた吾人に對する試鍊であつて、此内には幾多の教訓を含んでゐることを、思はれる。

支那の上下官民が一たび災報に接するや、從來の日貨抵制などの經緯を忘れて、一齊に起つて我の急を救ふべく敏捷な行動を取つたことに對しては、實に我々の感謝は痛切である、期せずして兩國民の感情は和らぎ、一方の好意は他方の感謝を以て堅く結び付けられるに至つた。

大正十二年九月一日、天は此一大慘禍を我日本に降したが、これに依て眞正の覺醒が日支兩國民の間に起り、此相倚り相助くるの精神が啻に一時の現象に止まらずして、これを永遠に持續せしむることが出来ることすれば、日本國民は此配劑に對して感謝すべきであらう。

不幸、殘忍なりし大正十二年は茲に消へて、吾等は將に大正十三年所謂復興の第一年の新春を迎へたのである、復興の新年、吾人はそこに新たなる意氣と光明とを見出し、大に揮ひ立つて今後の計を樹てねばならぬ、それが吾人の任務であること考ふる。

(函南遺稿)

# ●日支親善論

天津警察廳長 楊 以 德

嘗て余は東洋の平和成るは、日支兩國人が眞實に親善の實を結んだ時である云つた事がある、日支兩國民は、地理人種文字上等凡ての點に於て、眞實に提携すべき必然性がある、然るに民國四年以來、兩國政府の政策上に錯誤を來し兩國民は爲めに離反の已むなきに至つた、之が爲めに日貨排斥運動もしばく起つたが、近來の空氣が一番險惡である、其結果兩國の親善は破れ、國際的に事端を醸さんとしてゐる憂慮すべき事件を惹起したのは、兩國の或種の人物の政策に利用されたものではあるまいか、國家を左右するものは國民であるから、若しも政府の措置宜しきを得ないために、種々の不祥事を惹起したものとすれば、兩國民一致共同して政府に迫り、其政策を一變せしむべきである、而かも兩國民は意思の疏通を圖るべき機關を有せず、協心努力することが出来なかつた今日、茲に日支紳商數百名が會合して、國際的交驪を爲すことは、日支國交上に裨益する事頗る多大である、此會合は日支の歷史上に特筆大書すべきものである、天津總商會長及排日團幹部等は、今日を限りに排日をやめ、日本と提携して東亞の平和を保ち、日支の共存共榮を圖らねばならぬ。

(本論は我大震災以前、日貨排斥の聲最も盛なる頃、天津警察廳長楊以德氏の幹旋により、天津曹家園に於て、天

津總商會主催の日支國民大懇親會が開かれ、支那側から總商會、排日團體の幹部百二十名、日本側から百六十名出席して、大に日支の親善を高調した、其席上楊氏の論じた大要である)

## ●支那避難者に對する同情が對支貿易上に影響を齎す

東京横濱地方の今回の震災で、汽船や鐵道で神戸大阪方面に避難して來た中華民國人は、學生九百四名、其他實業家勞働者等八千三百三名と云ふ多數であつたが、其中九割までは、大抵神戸港から乗船歸國した、此等避難者は齊しく身を以て漸く死地を逃れたもので何れも無一文であつた、これがため兵庫縣當局其他の有志は旅費を寄與し、郵船商船等は無賃乗船の便宜を與へるなど大に同情したが、殊に遙々異國に笈を負うて來て焼き出された留學生に對しては非常に同情が集まり、松方川崎造船所社長等は今後の日支、親善の爲めにもと、縣當局と協力幹旋し、これ等歸國學生の爲めに、汽船出帆の度毎に送別の宴を張り、旅費等を寄贈して慰めたほどであつた、されば此等の歸國者は勿論、在留同國人も皆一樣に、神戸市官民一同が拂つた同情と好意とに感謝し、續々感謝狀を送つて來る有様である、然か

もそれ丈けに止まらずして、歸國者の自國に傳へたところのものが、國民に感激を與へたものか、一時は日貨排斥まで稱へて、頗る不振であつた對支貿易にまで影響し、最近是非常に順調な現象をさへ示すに至つた、又避難者を送還のため彼地に赴いた船員などは、支那官民から次から次への請待を受けて御馳走責めに逢ひ、其任務を終へて歸國するに際しては、日本萬歳の歡呼を以て送らるゝ程であるのは喜ばしい。

## ●排日問題に對する卑見

在神 漁 夫

支那の排日問題が發生以來、日本國內に在る種々の團體に於て、其對策を講ずることが新聞紙上に散見いたしますが何れも大同小異のものやうに見受けまゝす、此内東京に在る日華實業協會は、日本に於ける第一流の紳商連の組織したもでの、最も實力ある而かも日本の對支實業家の代表的總機關とも申すべきものであるから、其對策は必ずや立派な、且つは公平なる議論であると信じて、悦で待つて居たのであるが、去る六月廿六日新聞紙上に發表したる所によつて、大體の輪廓は承知することを得ましたが、若しこれをしも事實とするなれば甚だ失望する次第であります、日本の輿論を代表する紳士紳商方の、熟議の上作を上げられた意見であれば、微々たる我等如きの一小商人の、彼是口

を挾む資格はない筈であります、兩國の共存共榮のため日華實業協會の作り上げられた輪廓を分別して、聊か愚見を申述べたいと思ひます。

第一(原文)『中央政府を相手とせず、直接地方官憲に嚴重なる抗議を爲すと共に、排日に因る損害は、地方官憲をして賠償せしむること』

此條項は支那中央政府を認めない所謂日本式の二重外交の方法と思はれます、若し地方官憲に嚴重抗議したら、一般商人は直ちに澤山の日本商品を買ひ、荷物は日本船に積込むでせうか、或は地方官憲が親ら出で、日本商品の買買を強制的に勧誘することが出来ませうか、恐らく強制賣買の法令等は世界中に發見することが出来ないでせう、然して排日による損害は如何なる方法を以て計算するか、去る六月廿七日大阪朝日新聞第五頁の一段に左の如く掲載してゐる、

(原文)排日問題、『翻つて最近我貿易の進路を阻害しつゝある處の排日運動を見るに、此運動がより惡化すれば、勿論相當の打撃は免れないが、今日迄の所さしたる影響は數字上には表はれてゐない、これは排日が長江一帯に留まつてゐるのと、又諸種の形式によりて輸出方法が取られるからである』

最も激しい長沙の件でも、公平に批判すれば罪は五分々々であると思ふ、宮憲に賠償せしむることは頗る困難であらう、若し官憲が賠償出来ないものとすれば、如何なる方法を取らるゝであらうか、

第二(原文)『借款及債權にして支拂期日の到達したものは猶豫なく取付くること』

支那政府の現状では、日本に對する借款は或は返済出來ないかも知れぬが、一般の支那國民の力は、日本に對する債務を返却するには十分であると信じます、一時義憤の債務だけ返済すれば、日支の親交は永久に破壊さるゝやうの恐れなきや、又外國より異議の出る等の事はなきか、第三(原文)『排日に因る損害高を北京公使に報告して、交渉の基礎となすこと』

此條項は第一條の末段と同様で、別に論ずる程の事もないのみならず、却て第一條と矛盾する様に思ひます、第四(原文)『我國に於ても經濟絶交を斷行し、排日の根本解決を爲すこと』

此の條は支那でも現在宣傳しつゝある所です、日支の經濟問題は重に政府と政府の關係であつて、一般人民は關係する程度が極めて少ないから、殆ど問題にはならないでせう、排日の根本的解決は別に在ると思はれます、

第五(原文)『特別關稅會議司法制度調査には出席せず、對支文化事業を取止むること』

關稅司法の問題は、平和會議に因て議定さるゝので、列國と日本政府と如何なる關係に在るか、これは外交界の大問題であつて、果して日本の輿論を一致するや否も、今日のところでは未定であると思ふ、又對支文化事業を取止むると云ふも、今迄如何なる文化施設を支那に向つて爲しつゝあるか了解に苦む所である、然し文化と云ふも甚だ範圍

が廣いが主として教育交通住宅衛生社會事業等を指して云ふのであらう、日本教育は元來昔は支那から輸出したもので、近代は歐米の輸入物である、交通も主として歐米に倣ひ、住宅等は一半は支那式一半は洋式と云ふ有様で、衛生も全國一般に普及し遺憾なき程になつたとは云はれないやうである、先日新聞紙の報道するところによれば、二萬五千圓を投じて支那學生五十名を招待して、日本の文化を見學させると云ふ計畫ありとのこと、四億萬人中より僅かに五十人だけを選抜すると云ふことは、格別大利益を得らるゝやうにも感ぜられないのである、社會は益々複雑になり昔時の美德段々に薄らぎ、種々の團體や階級等起りて、中々六ツケしき世の中となりました、何とかして古來の美風を失はないやうに致したいものと思ひます、

第五(原文)『日本内地居留の支那人の反省を促すこと』

此條は廣味甚だ廣汎にして了解に苦しみます、現在日本に僑居せる支那人は、排日運動の起る度毎に、いつも被動の地位にあつて主動の地位にあらぬことは斷言出來ます、それゆへ何時でも板挟みの立場にあつて、損失のみ受けて居ります、これは一般御承知のことと思はれます、日本全國に寄留する支那人は、男女老幼合計して約二萬人位でせう、此等の人々が其全財産を擧げて、日本の商品を買取つたところで輸出が出來ないなれば、矢張り日本の對支貿易は何等の影響もないのでせう、然るに若し日本から迫られて不得已本國へ引上る時は、其者が歸國の後日本に對して決して善意の宣傳はすまいと思はれます、

上記の議論中失禮の段は幾重にもお詫を申上ます、小生は支那に生まれ日本に歸化して、今日にては日本在籍の一人です、故に生れ故郷の支那も愛し、又在籍の日本も愛するのであります、愛の熱誠あればこそ自然に腹藏なく天真爛漫の意見も出るので、此點は誤解なきやう皆様に諒解を乞ふ次第であります、

偕て根本問題の解決に就ては、小生個人の鄙見としては無用の虛文條約を廢棄し、相互誠意を披瀝して親交を結ぶより外ないと思ひます、強力は一時的のものでは決して永久のものではない、支那の歴史天時地利人和其他物質的方面より觀察すると、民心の統一を欠くものは之に君臨することは出来ないのである、支那歷朝の推移を見るも何れも人民の爲めに變更したのである、最近清期亡びて中華民國の出現したのも、民心の推移である、原來弱者を助くるは平素大和魂と自負せらるゝ日本人の特有性である、支那の現狀は丁度日本の維新前後の時代と似通ふてゐます、支那の排外は日本の黒船や生麥鹿兒島等の事件と同一です、所謂過渡時代に見るべき一の添物です、支那の政局も之を例へて見れば古風の一大建物を取り壊して新築の設計を爲すやうなもので、敷地の選定や材料の選擇さては建築技師の任選等に力を用ゐるやうなものです、故に善隣の日本としては、出來得るならば之を助け之を手傳ふて、一日も早く完成させて立派な建築物を見るやうにして頂きたいと思ひます、清朝時代に一度華工問題のため、支那が排米騒ぎを起したことがありますが、是は間もなく圓滿に解

決しまして其後は左様なことは絶対に聞かたことはありません、排日は十年前に第二辰丸事件のため起り、それ以來殆ど繼續してゐるやうに年々繰返して起るのであります、此點は日本の方々に御研究を願ひたいのです、支那人は極めて感情に動き易いが、又決して調和することの出来ない性質ではありません、故に徒らに強力を以て取締ると云ふことは、却て反抗心を挑發するのみならず其効果は決して良くないと思ひます、

要するに排日問題の根本解決の近道は、極めて簡單であらうと思ひます、それは値段を低廉にして良好の商品を供給するにありませう、値段が安くて品物が好ければ、自然に需要を喚起し排日運動も何時かは消えませう、お互に兄弟牆に閤ぐの愚を止めて、世界の大局から日支兩國の立場を考へ、東方文明の發達と東亞の共助共榮とに協力するの覺悟あつては如何でせう、嚴めしき條文を連ねて却て一方の感情を害するよりは、極く打解けくだけで相談的に運んだ方が効力がありませうと思ひます、終に臨で今回排貨騒動のため日支の兩國の親交を害したことを、自分は深く遺憾に感ずる次第であります、妄言多罪（十一年八月記）





## 華文欄

### ●中日兩國關係談

王揖唐

夫中日親善問題、余曩者曾言矣、即欲兩國求一共同之目的、爲世界大同之先驅者是已、今再本此意繼續言之、親善云者、即互相愛之謂也、孔孟之教、則謂之仁、仁之量以世界大同爲歸、今者世界各國方日在強凌弱衆暴寡之中、而我輩日言大同、人將目笑爲迂腐、實則不然、孟子不言乎、惻隱之心、仁之端也、前者關東大震災、世界各國、對於日本罔不同情、力謀救卹、即我國朝野上下、各界人士、亦悉混其歷年以來對日之惡感、而爲善感、此皆惻隱心之流露也、孟子曰、苟能充之、足以保四海、大同實現、夫何難哉、故若論廣義、則人類皆應親善、若論發端、則東亞先應親善、親善之第一前提、即應先將障礙親善之種子、而脛削之、以漸造成兩國民一堂攜手之機會、而世界大同之基可植矣、質

六

言之、即日本不可以自動的無條件取消二十一條是已、或曰、君、華人也、爲此言、得毋自袒其國乎、余曰、唯唯否否、昔者、孟子有言、生於憂患、又曰、無敵外國患者、國恒亡、戰國之時、馮煖爲孟嘗君燒券市義、而孟嘗君卒賴其力以自保全、余爲華人而現居於日本者也、故若爲華人行、則二十一條儘可不必取消、即孟子生於憂患、敵國外患之說也、事雖不同、可以斷章取義、日本不乏大政治家大外交家寧并一馮煖而無之乎、余之居東也、今爲第四次新年矣、余蓋不能如朱舜水之終老於日本者、第五次新年、未知又在何處、日之朝野上下對余、亦有相當之感情、余故藉此機會、瀝誠而爲一言、黨有採吾說而行之者、本東亞之相愛、更推而至於人類之相愛、實行孔子四海之內皆兄弟之旨、傳及余自得親見世界大同之盛、甲子者、世界大運之始也、請以新年之言爲之券、

### ●文字音呼復古論質禹域有識之士大夫

久保 檜 谷

天下之事物。涉歲月之久。而漸變其用之利鈍。而舉天下不之察者有焉。蓋利其一半之便於用。而遺他一半之漸成鈍。

而不覺。猶病風之人。半身痲痺。而積年之間。遂忘記居坐臥之不便也。如禹域文字之惟取形之義。而廢聲之義。不其然乎。夫禹域文字之成形。皆有其象。邊傍冠足。各以類彙而分之。以便於記識。音乎異同。亦豈莫與義相關者乎。史載六義。許氏注聲形。而皆忽畧音呼之義。不能悉前聖命音之意。可憾也。余嘗試審之。禹域文字。或形類而聲不同。或聲近而形不同。而雖形不同。而聲近則義多相比似。（如東童、筒、皆有形長之義。如干、乾、看、間、艱、幽、崑、侃、柬、含、皆廉稜之義。如之、思、枝、思、施、子、矢、志、肆、至、示、皆、有引伸之義。今不一一。）雖聲不同。而形類則其義亦相比似。而聲之比似者。不可以四聲分。猶形之比似。不可以四聲分也。而古人之說文字。獨審形而遺聲者。何乎。形之易傳。而聲之難傳也。猶六藝中。存禮之較詳。而樂之既不可考乎。余於是乎。深惜禹域文字音呼之今失甚正也。（試以北京音呼衙。與漢音延呼野類。而不可知牙齶守門之義。呼東。與漢音呼豚類。而失形長之義。他類此者多。）抑禹域文字之音呼失其舊者。在何時乎。余謂。必在司馬晉之世也。五胡之奪

擄中原也。屠戮斬害。威播胡語。華民懾怖。一意倣倣。百年之間。遂亡漢音。自六代。馴致李唐。南北渾然三百年。

南人之頗存古音者。蓋不足奪中原之胡音。而復諸古也。自時厥后。學士大夫惟知四聲之變。有坦側延促之異。而不復知聲音各有表其義者。與形相離合。以便於用。千有餘年之久。數千萬之讀書種子。惟目閱而耳掠而已。未嘗有耳悉而目契者也。猶吾那所傳之漢音者。猶能存漢魏以前之音呼。惟西音之東傳。轉訛之應不少。然比之禹域之與胡音相混合以致聲音不足表其義。則何止東國之猶能存西國之美而已哉。夫人類之於聲音。實爲自然之所發。試比東西絕。域之語言而審其同音者。猶往往有其義之相符者。況同文之同音呼者乎。余切望。禹域學士大夫廢絕千百年來轉訛之胡音。而復漢魏以前之正音。以圖聲形相徵之便也。或云。禹域境土之大。變千百年來之語音。恐所不可爲。余謂不然。吾邦在德川氏之時。四國各用方言。地相隔之遠者。口耳之際。或有不借吾人之勞者。明治之政。大建學校。課幼學以一樣語言。四五十年之間。闔境語言。略歸於一。北溟之濱。南海之濞。語言話說。無有障塞。禹域廣濶。雖非吾邦狹小之可比。而備學校之制。以誨之。則其音之復於正者。亦不出

於百年耳。其便於用。而益於記識。以補人心之明者何如哉  
未知禹城有識之諸君子以爲如何也。

## ●中華民國震災遭難死

### 者追悼會

神戸中國華僑救護國主催同國人關東震災遭難死亡者追弔會  
十月十九日午後一時半舉行中華會館參列者罹災者遺族其他  
日支兩國人一千名僧侶讀經參列者祭文朗讀燒香等極嚴肅裡  
至四時終式

## ●大阪貿易同盟會主催

### 追悼會

大阪貿易同盟會主催大阪神戸兩商業會議所本會贊同之下十  
月二十日午後二時於神戸中華會館舉行華僑遺靈追弔會場內  
祭壇安置『中華民國留日關東震災遭難先友之靈位』之大位  
牌揭魂巧歸來之大額各種之供物大小花輪等推積場內定刻大  
阪府知事大阪市長兵庫縣知事神戸市長大阪商業會議所會頭  
神戸商業會議所會頭柯領事其他內外有志朗讀弔詞最後二川

大阪貿易同盟會長代答詞捧讀弔辭長樂寺住職林義昌師爲導  
師以佛式莊嚴行式哀號之聲不絕流式場添哀愁最後有一般參  
列者之燒香過四時終式

## ●留日寶教修業者歸國

中國廣東潮安縣城中開元寺僧釋純密師。以再昨年三月。抵  
日本紀伊國高野山。學密義。修習涉日。年之七月。杭州淨  
梵院僧釋大勇師亦踵至。本年二月。江蘇興福寺僧釋密林師  
亦踵之。純密師在寶壽院。從明王院主高岡法院。修加行。  
受傳法灌頂。勇林兩師從天德院主金山僧正。了加行灌頂。  
己而密師亦同兩師。寄住金剛三昧院。三人提挈。研攻不怠  
皆有所得。於是。十一月十九日。相携辭山門。二十日自神  
戶。開帆。回歸。其辭山門也。高野山總本山金剛峯寺。授  
三師以修法器。每人各一設。金山僧正贈律衣各一欵。藤村  
僧正。金山僧正。山口僧都。各贈兩界曼茶羅幅一双。以頒  
三師。密教之不行中國也久矣。三師之回。再見青龍果公遺  
教之出於世哉。峯寺授法器記曰。

某師崇嚮真言秘密之教義。追景弘法大師之德風。志抱永

霜。求法之維篤。程涉鯤鵬。視險之如夷。南山道場。久累時月。遮那妙旨苦積研鑽。完修四度加行。虔受傳法灌頂。既飽素慊。乃告歸錫。夫中華西安相傳密法。我祖師之所承衣鉢。連城美壁。今獨存趙家。彼荆山之土。既歸荒廢。師之回棧。燈之點明。一意精進。十方濟度。樹立既倒之法幢。長育性萌之寶芽。成就真俗合諦之教。裨補日華善隣之義。是本山之所以繫望於師也。因贈修法器用一設。以其意云。

大正十二年十一月

日本眞言宗高野山總本山 金剛峯寺

## ●復興第一次新春之東京

去秋九月京濱一帶之地震、誠爲空前未有之浩劫、其造次所之傳悲慘消息、時時驚迴於吾人心胸、然國人之沉毅處變、井然步武復興、頗博列國之驚嘆與讚美矣、

難民現在市區尙未釐然規定、暫時建造假板屋居住於其中、而大公不黨之春光春風、亦仍然薰射於一般甚遭燬壞之街市上、而在假板屋中、樂趣依然、舉杯而迪茲復興第一年新春

## 會報

八月四日 總會、下山手通六丁目神港俱樂部に於て開く  
出席者六拾餘名

九月六日 震災救援幹事會、下山手通六丁目神港俱樂部に於て開く、出席者十二名  
罹災中華民國神戸避難民負傷者救護の件を決議す

十月廿五日 本會震災慰安會、中山手通六丁目中華會館に於て開く  
縣市會議所、赤十字社、大阪貿易協會其他關係者招待七十餘名

十二月十二日 震災中華民國人、誤殺事件調査の爲め來神の僧侶顯蔭先生一行歡迎會、神戸商業會議所に於て午後六時より開會  
來會者知事、三部長、市長、兩助役、會議所會頭及び副會頭常議員、本會幹事其他七十餘名出席

尙十月一日附本會擔任書記林田袈裝吉氏辭職に付き小林史郎氏事務を引繼げり

## 追憶片々

○ 故西島函南氏は年二十で、静岡縣選拔生として支那上海日清貿易研究所へ入學、荒尾東方齋の薰陶を受けたが當時の同窓で現川崎造船所東京支店長の岡田晋太郎氏も、西島氏の亡くなつた同じ十二月十六日東京で逝かれたのも、不思議な廻り合せの様に思はれる、

○ 日清、日露兩戰役には通譯官として滿洲軍に従軍した、當時のことは氏の著日清日露從軍漫錄に詳しい、日露戰役出征の際に知友に配布した詩がある

不識人間功與名、慨然拋筆又西征、只期報國致心力、  
那顧離家別弟兄、萬里關河酣戰地、三春花柳異鄉程、  
直驅醜虜氷山北、鼓高鈇歌頌太平。

父君の授け給ひし太刀はきて

御旗の下に立つそ勇まし

○ 明治三十年前後の大阪在住時代は最も若々しい時代であつた、大阪控訴院、大阪地方裁判所に勤める外に大阪外國語學校に教鞭をとり、更に自ら清語學校を創設して多數の師弟を教養した、その頃教つた人々で産をなした人々、社會の爲め貢獻してゐる人々がある、著書もこの頃出版せられ

たものが多い、豪快な逸話も尠くはない、

○ 日露戰爭後神戸へ在住すること二十年、氏はこの土地は氣候がよくてよい、第二の故郷だと常に好んでゐたやうで、『中央へ出て一旗上げては』等勧める人もあり、『支那へ行つて一稼ぎする氣があれば資本を出す』等好意を示される人もあつたやうだが、遂に動かなかつた、神戸地方裁判所に勤務する外神戸商業補習學校の講師となり、曾つては週聞新聞『日華新報』の編輯をやつてゐた事があり、今では『日華實業』の編纂に従事してゐた、一時は語學校を始めて見たが續かぬやうで只時々著者を出したりした、

○ 氏の子煩惱は有名なもので晩年は全く子供達の成長をのみたのしみに、働いてゐたやうであつた、九月十四日二歳になる末子を失した際の悲嘆は側の見る目も氣の毒で、此度の病因も、こんな處から來てゐるのではないかとさへ思はれる、慶應義塾大學在學中の嗣子を始め中學校へ二人、高等女學校へ一人、小學校へ一人、今年學齡に達する女子一人の四男二女を残して逝かれた氏の心の内は推察するも餘りある、

○ 氏は性頗る恬淡で道義の念の強い人であつた、學問も思想もすべて東洋的ではあつたが近代のことに對する了解も深

かつた、各方面の知己も多い、氏の友人である神戸高等商業學校講師村田甲子郎氏は氏の訃を聞いて『偉大な學者を失つた、無二の親友を亡くした』と男泣きに泣いたさうである、

○  
氏は多趣味の人であつた、そして凝り性で往くところ可ならざるはなつかつた、詩もよくした、歌もよくした、人のため祝辞や、弔文をどれほど書いたか知れない、圍碁の如きは立派な田舎初段で二晩位徹夜して打つ事もあつた、諸曲も觀世の免狀をとつてゐる、擊劍も人に教へた事さへある、家具にかけても中々詳しい、商賈をやるのなら道具屋になる等云つてゐた、只繪畫丈は俺には駄めだと筆を投げたが批評丈は一人前にやつてゐたやうだ、

○  
氏は又異常な健康體で若い時分には弱かつた時もあつたさうだが五十を過ぎた今日尙潑潑たるものがあつた、酒も晩年はさうはやらなかつたがそれでも盃を手にして終日傾けることもあつた、それに支那料理は大好物、甘いものよろしい、餅よろしいの、健啖家で、友人仲間でも有名なものであつた、

危篤になる前日十二月四日苦しい身體を俥で出勤、裁判所で同僚とざるそばを食べて『久し振りでうまいものを食べた』と舌鼓みを打つて喜んだといふがあの健啖家が一つのざるそばに隨喜したのを想うて何とも云へない心持になる

○  
肝臓硬變症は不治の病ださうである、しかしあんなに早く逝かうとは誰も思はなかつた、本人も十一月中旬頃から病氣に罹つてゐる事は知つてゐたが十二月に入つても、勤先へも行けば、翻譯もした、原稿も書いた、それが五日に至つて腸出血があつて急變したのである、十二月十六日夕、病革るや自ら死期を知つたものゝ如く知友に通知することを目指し、子供親族の名を呼び、最後に二十八年の永い年月を共にした夫人を顧みて『自分は天國へ行けるか』と問うた、多年基督教によつて信仰を堅うせる夫人は『あなたは善い方ですから必ず天國へ行けます、私もあとから行きます、御安心してお出でなさい』と勵ますと『さうか、お前も来るか、皆一緒に行かう、』と云つたが間もなく靜かな眠に落ちた、

○  
十八日自宅に於て告別式あり神戸基督福音教會の牧師佐藤民太氏の悲痛な追悼演説があつた、二月郷里靜岡縣に於て本葬がある、氏と師弟の關係ある黄檗山の執事神戸長樂寺の住職林義昌師からは左の如き戒名を贈られた、

『天祥院心溪函南居士』

○  
こゝに西島氏の一家は大正十二年に於て父と子の二つの靈を送つた、大と小の二つの新しい位牌の前に燈が淋しい

(大正十三年一月西尻池假寓にて 杏花村誌)

# 弔西島氏靈

伊豆函南村長 石和寅之助

西島氏靜岡縣田方郡函南村肥田志良以家之出身也幼名稱染之助後嗣西島氏改稱西島良爾號函南矣

初學于本村立函南小學校以文才被賞揚矣終學而後暫於母校執教輒數歲當時政府爲日清貿易有企劃於清國上海創日清貿易研究所現時東亞同文書院是也氏者靜岡縣選拔生入學研究修養四ヶ歲竣業哉時恰會千日清之役直爲國事奮起而從軍就第一軍司令部附陸軍通譯官之職鴨綠江戰鬪之後義州、鳳凰城、安東縣、岫巖、海城、牛莊、田庄臺各戰鬪地轉戰參加或爲交通事務或偵察事務或爲糧秣補給事務盡粹頗務矣後臺灣征討總督府附被任命渡台後以病歸朝矣

軍息和議成後於大坂接訴院奉職矣職間起劃私立大阪清語學校爲青年指導數年再有日露之政變戰滿洲之野氏者率學弟數十名從軍矣從前戰地點、安東縣方面轉遼陽、奉天之各地以戰功被叙勳六等平和克復後奉職神戶地方裁判所側執文筆專心舉日支親善之實

這回突如有飛電稍聞小康心安之間終按干弔電予有從兄弟之

間爲震災後救護及復舊事業閑日再無會期而接此悲報痛歡不能也堪難然氏者嗣子外男女皆才學有秀相立而可不愧遺名矣幸以瞑焉

今哉幽明異處亦無談期也嗚呼

## 哭

函南先生

居官且托舌頭言忠信持身見本根異域  
姓名題雁塔沿邊文字抵金門情懷兩地  
鏡相映交道卅年容永溫惆悵心期爲眼  
淚無由仔細語音論

高野山學員久保雅友拜稿

悼

筆凍てぱりく／＼卷紙刺す如し

燕 子

函南西島君の靈を弔ふ

香そ立ちし炭は崩れて霜の朝

其 葉

御靈にさゝぐ

おほごかの笑顔うかゞひしまばたける  
瞳うかびて今もまかなに

ごこしへのねむりやすけきおゝつきに  
風靜かなれたよふらなし

みうつしゑにさゝげしごもしありし日の  
思はせてまばたきやまず

うつしゑに今ぞさゝげんうけたまへ  
好みたまひしこれのうま酒

初 子

### 西島函南氏の主なる著書

支那事情支那語教範(以上寶文館發行)、支那語教科書  
支那語教程、支那語會話六十日間卒業、日支商用會話  
日支會話問答、支那助辭動詞詳解、華瀛商用會話、忠  
經孝經千字文三字經新註、支那官話字音鑑(以上石塚  
松雲堂)支那官話字典(以上青木崇山堂)清國一班  
(以上博文館)其他

### 御▲注▲意

故西島良爾追悼の名を利用して關係なき  
新聞雜誌社が廣告を強要して居ることを  
聞きました、大方の御注意を願ひ上げま  
す、



支那料理 平和樓の更始一新

元居留地京町の平和樓は昨年の十一月丁度開業一週年に達したので料理の献立に改善を加へるゝ共に更始一新の意味で値下を敢行した、業主十河氏は業畧稀に見る人格者であつて室内の設飾より卓上の器具に至る迄總て清楚を旨として居るから食事する上に氣分が好いので大少の宴會又は御家族の團樂等に盛んに利用されて居る而して料理は從來天津や北京の濃厚なものでなく福建料理を主として淡泊な中に日本人の嗜好に適する様にしてゐたが通人などから余り淡泊過ると評があつたのでそれに改善をなし濃厚の程度を幾分加へられたので一般に歡迎されて居る。

大正十三年一月十五日印刷

大正十三年一月二十五日發行

神戸商業會議所内

日支實業協會

主幹 西島良爾

神戸市再度筋九十九番屋敷

發行兼編輯人 矢田寛也

神戸市下澤通二丁目九十番屋敷

印刷人 山田徳三

神戸市下澤通二丁目九十番屋敷

印刷所 共信印刷株式會社

神戸市再度筋九十九番屋敷

發行所 神戸日支實業協會編纂部